

英国図書館研修報告

とび 飛
あき な 明奈
(三田メディアセンター)

1 はじめに

2024年9月から12月の約3か月間、英国ノリッジのセインズベリー日本藝術研究所（以下「SISJAC」とする）リサ・セインズベリー図書館を拠点に、英国およびフランスの図書館における研修の機会をいただいた。本研修は2012年に開始され、筆者で10人目の派遣者となった。

2 研修の目的

研修にあたり、自身の目的を三点設定した。一点目は、英国の図書館における取組みを調査し、今後の業務にいかすこと。二点目は、日本の図書館に求められることを理解し、国際的な協力関係の中で果たすべき役割について考えること。そして三点目は、三田メディアセンター選書担当およびメディアセンター本部目録担当での経験から関心を持っていた、(a) コレクションマネジメント、(b) 図書館目録、(c) 英国、欧州の日本研究図書館における課題について、特に知見を得ることとした。

3 研修内容

(1) セインズベリー日本藝術研究所

研修の拠点であるSISJACのリサ・セインズベリー図書館では、和古書を含む日本語資料の目録データ登録を行った。受入資料は、日本芸術関係の研究書や図録が主であるが、考古学や書道等、対象の範囲は広い。また、国立国会図書館（以下「NDL」とする）や諸団体からの寄贈も多い。そうした現代本に加え、江戸時代の画譜等の和装本60タイトル程も整理した。日本美術関係の資料に集中的に触れながら、英国における目録データ作成を経験し、WorldCatとCiNiiにデータを登録できたことは、研修の成果の一つである。

またSISJAC所属者を含む日本研究の研究者との交流や、主催するイベントに参加する機会を得た。SISJACは開所25周年を迎え、「Japan in Norwich 2024」として、様々な行事が行われていた。11月に

ロンドンで開催された国際会議¹⁾では、日本芸術や考古学に関する発表が行われ、最新の日本芸術研究の一端に触れるとともに、日本芸術の受容のされ方を肌で感じることができた。会議の前には、在英国日本国大使館で行われた外務大臣表彰にも参加した。SISJAC所長のSimon Kaner氏が、英国における日本研究の発展・促進及び両国の文化交流に貢献されてきたことに敬意と感謝を表するものであった。毎月開催されるThird Thursday Lectures²⁾を含め、イベントを通じて多くの方々と交流させていただく中で、SISJACが果たしてきた役割と、その図書館の重要性を再認識した。



図1 セインズベリー日本藝術研究所

(2) 訪問機関でのインタビューと事例紹介

日本研究関係の図書館を訪問し、コレクションマネジメント及び図書館目録に関する聞き取りを行った。Japan Library Group UK（以下「JLG」とする）の会議では、三田メディアセンターのコレクションマネジメントに関する発表を行い、情報共有にも努めた。リサ・セインズベリー図書館の平野明氏にご紹介いただき、訪問した主な機関は、表1の通りである。

表1 主な訪問先

日 程	訪 問 先
9/17-12/24	セインズベリー日本藝術研究所 リサ・セインズベリー図書館
10/14-15, 11/14	イースト・アングリア大学図書館
11/6	Japan Library Group UK会議 [会場：大英図書館]
11/7	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (SOAS) 図書館
11/8	在英国日本国大使館 図書館
11/9	Conference : Looking Forward in Japanese Arts and Cultures [会場：ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ]
11/22	大英図書館
11/25	ケンブリッジ大学図書館
11/26	ケンブリッジ大学アジア中東学部 図書館
12/3	シェフィールド大学 West Bank Library
12/5	エジンバラ大学図書館
12/16	コレージュ・ド・フランス Bibliothèque des études japonaises
12/17	パリ日本文化会館 図書館
12/18	Bpi:Bibliothèque publique d'information

選書担当である筆者の業務に関連し、受入資料の選定方法、冊子と電子資料の選定、課題、資料の除籍について話を伺った。

(a) 受入資料の選定方法

リーディング・リスト及びリクエストに基づく購入は、最も多くの機関で行われていた。本学でも利用していたEx Libris社のLeganto³⁾等、オンラインのリーディング・リストに教員が登録したタイトルを図書館で購入する。リクエストについては主として、教員や学生からサブジェクト・ライブラリアンへのメールや、図書館のWebサイトに用意したフォーム等からの申請、電子ブックのプラットフォーム経由の申請が使われていた。基本的にリクエストを謝絶することはない。高額な場合や、継続資料を新規購読する場合以外には、サブジェクト・ライブラリアンによる選定は行わず、プロセッシング・チームが購入手続きを行う機関が複数あった。こうした方法で受入資料を決定している機関では、自主的に確認しない限り、サブジェクト・ライブラリアンが受入資料を見る機会はない。また、継続資料の新規購読

や中止、高額なデータベース等の購入になると、図書委員会で決定される機関が多数であった。次に多いのは、書店のカatalogやWebサイトからの選定である。この方法で選定していたのは特に分野と所属者の研究内容についての知識が豊富な司書で、日頃から新刊情報を確認していた。司書がその言語を読解できない場合は、リクエストへの対応中心の選定になりやすい。日本語や日本の出版事情に明るい司書がない図書館では、日本関係の資料を積極的に受入することは難しい。東アジアや日本研究担当の司書でも日本人は減少しており、英国の図書館での日本語資料の受入も減っていくと思われる。その他の方法として、ケンブリッジ大学アジア中東学部図書館では、学部のWebサイトを活用し、講演等が行われる際にはゲストの著書を確認し、収集していた。受賞歴のある現代作家の小説を購入している機関もあった。また、寄贈資料からの選定については、書庫スペースや受入にかかる人手不足等の理由から、どの図書館も慎重に行っていた。NDLの資料の国際交換制度を利用している機関もあるが、それも減っているとのことである。

(b) 冊子と電子資料の選定

大学図書館では、アクセシビリティ、スペースの観点から電子資料が優先され、それがポリシーとして掲げられている。例えばイースト・アングリア大学（以下「UEA」とする）のCollection Development Policy⁴⁾冒頭1.0には、“Digital first”とある。利用者の傾向を見ても、特に新型コロナウイルス感染症のパンデミック後は、電子ジャーナルだけでなく電子ブックもより定着したという。提供までの時間が冊子より短いことも評価されている。一方、日本語資料では冊子を優先する、または電子優先のポリシーは適用しないという機関が多かった。理由として、電子版の販売がない、ユーザ・インターフェースに不満がある、ダウンロード不可のことが多い等の意見があげられた。「なぜ日本の図書は冊子刊行から電子ブック刊行までこれほど時間がかかるのか」と複数の方から尋ねられた。エジンバラ大学では、研究者の希望で日本の電子ブックサービスの利用を開始したが、準備に一年を要するほど導入のハードルが高かったという。なお、日本語資料の冊子は、今回の訪問先においては、ほぼ同じ日本の書店経由で購入されていた。支払い方法に融通をきかせてく

れる点等が評価されており、エメールであれば二週間ほどで利用者に提供できるという。

電子資料優先の流れは避けられないが、留意すべき点について考えさせられた事例を二点あげたい。一点目は、セキュリティである。2023年10月、大英図書館（以下「BL」とする）がサイバー・アタックに遭い、ほぼ全てのサービスが停止した。訪問時はそれから1年以上が経過していたが、電子資料の閲覧を含む多くのサービスが再開できていなかった。影響はBLに止まらず、ケンブリッジ大学等にも及んでいた。英国の法定納本図書館では、電子納本への切り替えが進んでおり、それらは館内の専用端末で閲覧できる。各図書館での閲覧は、BLのサーバを経由して行う仕組みのため、閲覧不可となった。二点目は、経済的な問題である。パンデミックで様々なものがオンライン化されたとき、自宅にコンピュータやネットワーク環境がない人々が問題になった。図書館も常にこうした問題に配慮しなければならないことを実感した。

（c）コレクションマネジメントに関する課題

共通の課題は予算と書架スペースに関するもので、その他は機関により意見が分かれた。新規受入を基本的にリーディング・リストとリクエストから行うものとすれば、課題は少なくなる。司書が日本語資料を選定する場合には、言語の理解、他の地域研究と同程度の予算配分の中で日本語資料が高額であること等があげられた。所蔵資料を熟知している方は、特殊な資料や、来歴不明の資料の整理等を課題とされていた。選書に政治的な偏りが出ないよう細心の注意を払う必要があること、支払い方法が煩雑で購入できない場合があること等も課題にあげられた。

（d）除籍

今回の訪問先は、書庫を増築する等の措置を講じている、納本図書のため処分できない、といった理由から除籍を行っていない機関が多かった。非西洋言語の資料は、言語のわかる担当者がいないため対象資料の選定ができないという機関もあった。エジンバラ大学では、目録データが未登録の中国語資料から除籍対象の選定を行っていたが、中国人の目録担当者とサブジェクト・ライブラリアンが協力し、実現したということである。本学でも、書庫狭隘化の対応は必至であるが、何をどのように除籍するかは難しい問題である。そこで、大規模除籍を行うUEA

で話を伺った。UEAでは、利用者のフィードバックを受け、また図書館を設計したDenys Lasdun氏の当初の意図に従い、増築された書架を取り除き、利用者スペースを作るという目標が定められた。具体的な方法は図書館に任せられており、担当管理職が置かれ、長期的に取組みが行われている。専用ツールであるOCLC GreenGlass⁵⁾を用い、数年間の利用状況や国内の他の機関の蔵書数などを入力し、除籍の目標数と照らし合わせながら蔵書分析、方針の検討が行われていた。教員の理解を得るため、説明を行いつつ進められている。利用者のためのスペースを考えるという目標を共有し、人とツールを準備し、実行に移している現場を見せていただき、大変勉強になった。

多くの司書の話を知り、コレクションマネジメントにおいて最も大切なことは、研究者の扱う主題、授業の内容を把握することだと感じた。利用者の現在のニーズを理解するため、継続的に動向を追う必要もある。三田メディアセンターでは、教科書やリクエストによる購入に加え、図書館でも一定数の資料を選定し、受入資料は担当者が確認している。限られた時間の中でもこうしたことを継続し、職員が蔵書を確認できることは、大変貴重であると改めて感じた。これは、先輩方が知識や経験を引き継いでくれたからできることであり、今後も繋げていけるよう尽力したい。図書館が積み重ねてきた歴史を大切にしつつ、電子資料の扱い等変化への対応を行うこと、役割を終えた資料の除籍を計画する等柔軟性を持って課題に向き合うことが求められると感じる。

b 図書館目録

筆者のメディアセンター本部目録担当での経験から関心のある図書館目録について、目録データ登録方法、課題に感じている点を伺った。

（a）目録データ登録方法

目録担当者は減少しており、訪問先の図書館には、目録だけを担当している司書はほとんどいなかった。日本語資料については、日本語がわかる場合にはサブジェクト・ライブラリアンも目録データ登録を行っている。英語資料については、資料購入の際に目録データや装備まで含めて購入できる、シェルフ・レディ・サービスを利用することで目録登録を行わない図書館もある。具体的な登録方法については様々であった。SISJACは慶應と同様、

WorldShare⁶⁾やAlma⁷⁾といった自館の図書館システムに登録し、所蔵のビジビリティを向上させるため、WorldCatやCiNiiといった他のシステムにも登録している。BLでは、自館の図書館システムに登録すると自動的にWorldCatに登録される。パリ日本文化会館はAlmaのみ、在英国日本国大使館の図書館はCiNiiのみに登録している。コレージュ・ド・フランスでは、フランスの研究図書館の所蔵が登録されているSudocに登録し、自館の図書館システムへはSudocから自動的に登録される方法を採用している。

(b) 図書館目録に関する課題

共通の課題は、人と時間のリソース不足である。英国の大学では学費値上げによる留学生の減少等により経営がひっ迫し、司書が減らされたり、退職者の分の補充がなかったりと、厳しい状況であった。目録担当者は特に減っている中、自館の図書館システムに加え、他のデータベースにも登録を行うことは、必要性は理解していても難しく、自動化等の対応が行われている。SISJACでは、WorldShareにはMARC21、NACSIS-CATはコーディングマニュアルに沿って登録するため、記述ルールを二種類覚えたり、一方は英語で他方には日本語で注記をしたりと、単純に二度登録するだけではない大変さもある。またWorldCatには、日本語がわかる人が利用するには抵抗を感じるほど、誤った日本語が含まれる書誌データが散見される。担当者は、どの大学の誰が作った書誌は信頼性が高いといったことを把握している。慶應を含む日本で作られたデータも登録されているが、海外でそれを利用するには多くの修正が必要となり「参考にはするが、自分で入力した方が早い」という意見もあった。ただし、担当者の不在等により専門性や知識の継承が難しくなれば「独自の書誌データは維持せず、WorldCatのデータをそのまま利用すればよい」という意見が、ますます強くなっていくように思われた。

目録を経験しない司書が増加する現状を改めて実感したが、英国等で司書の代表的なポジションであるサブジェクト・ライブラリアンの仕事においても、やはり目録の理解は必要に思われる。技術が向上し、検索できればよいという考えもあるが、書誌がどのように記述され、登録されているかわからなければ、検索できていないことに気が付くことができない。

利用者の求める資料を早く正確に探すには、どのデータベースをどのように検索するのがよいか実際にわかっていることはとても役に立つ。あるサブジェクト・ライブラリアンは「目録登録は自分の立場の人がする仕事ではないため、よくわからない」と言われた。一方、目録登録も行う別の司書は「目録は資料がわかる人の仕事だった」と言われた。慶應では目録担当を維持しており、筆者も実際に経験した中で、どのような本が刊行され、受入されているか、他の図書館でどのような資料を持っているのかといったことを学んだ。そこで得た知識は異動後にも役に立っており、図書館の仕事において非常に大切なものであると改めて感じている。また、この体制を続ける意義を改めて実感した。

c 英国、欧州の日本研究図書館における課題

欧州の日本研究図書館は、機関数も各機関の司書も多くないため、様々な協力や交流が行われている。JLGやEuropean Association of Japanese Resource Specialists等は、定例会議やイベントを開催する他、レファレンス質問への協力や、重複した本の寄贈、相互貸借など、参加館同士で日常的に情報共有と協力が行われている。そのため、担当者の入れ替わりが大きな課題となる。JLGの定例会議に参加した10機関のうち半数の司書は、日本研究以外も担当していた。入れ替わりで日本語がわからない方が着任した機関、東アジア担当者が日本人から韓国人に代った機関、前任者の退職後に補充のない機関もあった。その結果、日常的な協力体制が崩れてしまう、専門性の継承が途絶えてしまうといった問題が生じている。具体的には、これまで重複本を融通し合っていた機関で、寄贈を含む新規資料の積極的な受入が止まってしまうたり、相談が難しくなったりしているという。プレグジットにより関税が課せられ、英国と欧州の間での相互貸借が難しくなったという話もあった。また、機関内でのポジションの確保も課題の一つである。担当者や予算を確保するため、大学や所属機関向けのアピールが行われていた。

加えて、日本からの支援について韓国との比較から問題を指摘する声もある。韓国は、出版社から販売されている本でも申請すると購入して寄贈してくれたり、韓国文化を紹介するパネルを館内に設置するための資金を提供してくれたりするが、日本にこうした制度はなく、日本の資料を充実させるのが難

しいという。またNDLの図書館向けデジタル化資料送信サービスのためにデジタル化された資料が、実際的には利用できない問題も度々指摘された。このサービスは海外の図書館からの利用申請が可能ではあるが、制約が厳しく導入は困難であると多くの機関で言われた。デジタル化された資料は図書館間貸出の対象外となり、現状それらの資料を海外の人が利用する方法はない。JLGは、NDLと駐日英国大使に改善要望を伝えている。他にも、日本の研究書の価格が高いこと、郵便振替など対応が難しい方法でしか購入できない場合があること、図書館向け電子資料の販売が少ないことや、使いにくいことなどが日本語資料入手の課題としてあげられた。これらの問題の多くは今に始まったことではないが、状況を理解するところから始め、日本の図書館からも協力できることはないか、考えていきたい。

d 事例紹介

次に、訪問先の図書館の取り組みから、特に面白いと感じた事例を紹介する。

(a) イースト・アングリア大学図書館

2024年夏、入口のある「フロア0」の改修が行われた。書架をなくし、約80席が増設された広々とした空間には植物が配置され、昼食をとりながらオンラインで会話している学生もいて、賑やかだった。8時から18時は学生証の提示なく入館可能である。上層階には静かなエリアもあるが、UEAの図書館は、学生の居場所としてよく使われているようであった。10月に行われた改修後のオープニング式典では、学長が関係者に感謝の意を表し、来館者数の増加や学生からのポジティブなフィードバックについて報告された。英国国内での大学の評価に影響することもあり、学生からの良い評価を得るための取り組みが積極的になされ、実際に来館者数も増加していたが、一方で以前の方がよかったという学生の声も耳にした。利用者の多様なニーズに応えていく難しさを感じつつも、学生の意見に耳を傾け、その図書館に合うスタイルを模索された事例であると思う。

次にDigital UEAについて紹介する。新学期に行われるセミナーの一種で、一週間毎日、ワークショップと展示が行われた。司書と、データベースを提供する企業の担当者等により、OPACや各データベース、リーディング・リスト、AIの利用方法等のセッションがあり、事前予約不要で参加できる。「オー

ブンアクセスとはどういうものだと理解していますか」といった問いかけがあり、参加者がその場でスマートフォンやラップトップから回答した内容をスクリーンに表示する等、参加型のものも多かった。Digital UEAはその名前の通り、デジタルに特化してプログラムが組まれていた。OPACの使い方でも冊子の説明はほとんどなく、図書館サービスがデジタル化していることを強く感じた。

(b) ケンブリッジ大学アジア中東学部図書館

くつろげる空間を確保する、お茶の時間を作る、パズルや折り紙で息抜きしてもらう等、厳しい授業カリキュラムの中で学ぶ学生のメンタルケアを重視したサービスを、積極的に提供されていたことが大変興味深かった。

(c) シェフィールド大学West Bank Library

“Sheffield Authors Showcase”という優れた教員著作のコレクションに追加したい本をリクエストしてもらう取り組みが行われていた。訪問時には、“The University of Sheffield/Routledge Japanese Studies”という日本学科の教員著作が展示され、コレクションに追加したい本があれば、専用の棚に移すことでリクエストできるようになっていた。

(d) エジンバラ大学図書館

Royal Literary Fund⁸⁾で派遣されたフェローが図書館内に滞在し、アカデミックライティングのスキルを向上させるための、50分間の一对一のセッションを無料で受けることができるサービスが学生に人気を博していた。フェローは英国のプロの作家で、当時は3名が派遣されており、全員小説家であった。

(e) Bpi : Bibliothèque publique d'information

パリの研究図書館は敷居が高く、利用できる図書館に限られるという。そんな中、誰にでも開かれた図書館として多様なサービスが行われている。広い閲覧室ではピアノ等の楽器も利用でき、ゲームやマンガも充実している。障がい者サービス、移民向けの語学教室や様々な講座も行われている。そのため、学生を始め多くの人が訪れ、入館まで2時間待ちになることもあるそう。電子資料の提供についても積極的で、提供元に公共図書館向けのサービスとして必要な条件を伝えて新しいサービスを作る、他の公共図書館向けに電子資料の提供方法についてレクチャーする等の活動も行われていた。

(f) パリ日本文化会館図書館

会館で行われる日本文化関係のイベント、映画祭や展覧会に関連した資料の購入や展示を積極的に行っている。図書館利用者向けのサービスに加え、会館のイベントを企画する国際交流基金の職員に向けたサービスが行われている。図書館の存在意義を内外にアピールし続けることの大切さを強く意識した。

4 おわりに

研修を通じて得た知見や人とのつながりは、書籍等からは得られない価値あるものであった。漠然としていた日本研究のイメージが、具体的な研究者や資料として認識されるようになったこと、それを支える司書の仕事を実際に見て学ぶ機会を得たことは、貴重な経験となった。こうした経験から、図書館スタッフとしての役割を改めて見つめ直し、利用者と資料の理解を深めること、知識の継承を支えることの重要性を再認識した。メディアセンターが築いてきた良き歴史を途絶えさせることなく、今後もその発展に貢献していきたいと強く感じている。

英国生活の3か月間、異文化を目の当たりにし、業務に限らず学んだことは数知れない。ある日「アメリカが世界だと思っている？」と問われ、はっとした。歴史的にアメリカの図書館情報学と関わりのある慶應の図書館・情報学科で学び、米国で作られた規則に従い目録を作成してきた筆者は、米国の基準が図書館の基準だと考えていたかもしれない。書誌に“color”と記述したところ、英国では“colour”を用いると指摘されたこともある。日本にいる時とは違う解像度で世界を意識した瞬間であった。

また、歴史が大切にされていることとその重要性を日々実感した。英国では観光地だけでなくパブ等でも、Webサイトでour historyを紹介している。大切にするだけでなく常に歴史がアピールされており、特に魅せ方については英国に学ぶところが多いと感じた。そして、海外から慶應を見直すことで、その歴史を再認識する機会にもなった。例えば、他大学では貴重書として扱われるような和装本の一部が、本学では学生が書架で手に取って利用できる点は、海外の研究者にとって驚きであり、興味深い取り組みである。こうした特色を積極的に発信することで、海外からも慶應の魅力をより知ってもらえるよう努めたい。

最後に、訪問を受け入れ貴重な機会を与えてくださったSISJACの皆様、様々なことを教えてくださったとともに研修をコーディネートくださった司書の平野明さん、多くの質問に大変親切に答えていただいた訪問先の皆様、そして不在時の業務を引き受けて送り出してくださいましたメディアセンターの皆様に、心からの感謝を申し上げたい。

注・参考文献

- 1) Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures. Conference: Looking Forward in Japanese Arts and Cultures.
<https://www.sainsbury-institute.org/events/conference-looking-forward-in-japanese-arts-and-cultures/>
- 2) Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures. Third Thursday Lectures.
<https://www.sainsbury-institute.org/third-thursday-lectures/>
- 3) Ex Libris Group. List Management System : Leganto.
<https://exlibrisgroup.com/products/leganto-reading-list-management-system/>
- 4) The University of East Anglia. Collection Development Policy 2023-2025.
<https://assets.uea.ac.uk/f/185167/x/be2b3074e1/library-collection-development-policy.pdf>
- 5) OCLC. GreenGlass: Evidence-based decision support for libraries.
<https://www.oclc.org/en/greenglass.html>
- 6) OCLC. WorldShare: Enable shared efficiencies and innovation.
<https://www.oclc.org/en/worldshare.html>
- 7) Ex Libris Group. Library Management System : Alma.
<https://exlibrisgroup.com/products/alma-library-services-platform/>
- 8) The Royal Literary Fund. The Royal Literary Fund.
<https://www.rlf.org.uk/>